

博士論文要約

本博士論文ではとりわけ作品読解に重きを置き、新たな読みの可能性をひらくことをねらいとしている。従来の評論・研究は、向田の家族観と作品とを結び付けて論じたものがほとんどで、作品研究としてはやや膠着してしまった感がぬぐえない。本博士論文の第一部「家族の見せ方の変移」では、向田の家族観を基本的事項として踏まえつつ、向田作品において家族がどのように描かれたのかという、描かれ方の変遷をたどった。その結果、向田晩年の作では、家族が個人を映し出す装置として機能していることを明らかとすることができた。向田作品の家族像を論じたものは数あるが、家族が装置として機能していることを論じたのは管見の限り本論文が最初であろう。

第二部「再考『あ・うん』」は、作品論的にも生成論的にも非常に重要な作でありながら、これまでごく表面的にしか読まれてこなかった『あ・うん』を読み直そうと試みたものである。『あ・うん』にはヴェアリアントとして雑誌発表形が存在しており、これは脚本から小説へと仕立てられる際の向田の苦労・工夫が反映された唯一無二の重要な資料であることは間違いない。脚本・雑誌発表形・単行本をつぶさに見渡すことができれば、『あ・うん』の生成の秘密に大きく近づくことが可能となる。脚本のノベライゼーションは、向田にとって長編小説へのステップであったのではないだろうか。単行本と雑誌発表形の異同から、小説を著す際、最終的に何を取捨したのかが見えてくるであろう。つまりこれによって向田の思考を少なからず探ることが可能となるのである。

第三部「異なる次元への飛躍」では、あえて非日常を問うことで、向田が描き続けた日常を解釈しなおそうと試みた。向田は「陽画（ポジ）と陰画（ネガ）が、ぐるりと入れ替わった」という一文で日常に潜む間／魔を表現するが、それと同時に、何があっても相変わらずあり続ける日常にわれわれの目を向けさせるのである。人生の山も谷も、すべては壮大なマンネリズムのなかで生じており、人の手に負えない。向田は何気ない日常を描いたように見えるが、実はそうではなく、手を下せぬところに日常があることを活写しているのである。『男どき女どき』は前作『思い出ランプ』よりも深くその点を意識し、掘り下げている作であると言える。

ところで、われわれには脱することのできない領域がいくつかあって、それはたとえばこの私、この世界、この日常などをあげることができる。代替不可能なこの私について本論でくわしく論じたが、代替不可能性を主張することは常にもどかしさを伴う。親しい他者の死、自身の体験、記憶などが好例であろう。ほかの誰のものとも替えられないが、しかしありふれたものであるので、しばしば「同じ」とされることとなる。『父の詫び状』を書いた当時、読者から共感の声が寄せられたが、その一方で、自身の家族・体験が、記憶の総体と化してしまうことに少なからず疑問を感じたはずである。共感をもって読まれることを否定しないが、はたして共感とは何であろうか。このような観点から向田に生じたと思われるジレンマを考察する。

また実践女子大学図書館所蔵資料『森繁の重役読本』を取り上げ、向田の初期脚本に関する考察を行った。本論文は、脚本家としていかに熟達していったのかを、資料を用いて示したという点で画期的である。放送用台本はその扱いが難しく、課題も多い。いかに取り扱うかを考えることは、今後の研究にとって非常に重要なことである。ともかく使用された後、顧みられなくなった放送用台本を再びひらく以上、そこに生ずる動きを可能な限り読み取り、反映させることをしなければならない。なぜなら、たとえ流布のために活字におこしたとしても、けっして蘇生しないからである。本論は、脚本家によって書かれた脚本から、役者による視聴覚表現へという、別の次元への飛躍を見ることを目指したものである。